

グローバルな視点と能力を培う社会科授業の創造

— アフリカを事例地域において —

東京学芸大学附属国際中等教育学校 古 家 正 暢

目 次

はじめに	64
1. 知的好奇心を喚起する教材探し	64
2. テーマ「国際協力って何だろう？」—要約—	65
3. テーマ「さまざまな資料から読み解くアフリカ」—要約—	67
4. アフリカ理解を進めるために	70
5. 今後の課題	71

グローバルな視点と能力を培う社会科授業の創造

— アフリカを事例地域において —

研究代表 東京学芸大学附属国際中等教育学校 古家 正暢

顧問 成田喜一郎（東京学芸大学教職大学院）／赤坂 寅夫（東京都教職員研修センター）

研究員 秋山寿彦（附属国際中等教育学校）／岩岡敬祐（附属大泉小学校）／三大寺敏雄（附属大泉小学校）／中村昌子（附属大泉小学校）／中村文宣（附属国際中等教育学校）／長谷川智大（附属国際中等教育学校）／彦坂好郎（練馬区立大泉中学校）／藤木正史（附属国際中等教育学校）／山本勝治（附属国際中等教育学校）／横尾康幸（練馬区立橋戸小学校）／吉田英史（東京都立稔ヶ丘高等学校）

はじめに

本校社会科（後期課程：地歴科・公民科を含む）では、本学のプロジェクト研究のテーマとして『グローバル社会を生きる視野と能力を持つ児童・生徒の育成をめざす社会科授業とカリキュラムの開発』を掲げ、附属大泉小学校はもちろん練馬区内の小・中学校の社会科教諭と連携して研究にあたってきた。プロジェクト研究の初年度は、「アフリカ」を事例地域におき、グローバルな視点と能力を培う社会科授業を創造することとした。

本校はもちろん附属大泉小学校においては、日常的に海外教育体験児童生徒と関わることのできる教育環境にある。しかし、このように恵まれた環境にあるからといって、自然に「グローバルな視野と能力」が子どもたちに身につくものでは決してない。まして、帰国児童生徒の少ない公立の小中学校においては尚更のことである。そこで、私たちは子どもたちの目線に立って、身近な所から「アフリカ」学習に入ることをめざした。

また「今、なぜ『アフリカ』か…？」と問われるならば、2013年に TICAD V (Tokyo International Conference on African Development) が開催される。アフリカは私たち日本に住む者にとって「遠くて遠い国」である。ゆえに、さまざまなステレオタイプのアフリカ像が、まことしやかに語られている。それだけに、私たちの創造したアフリカ学習を通して、アフリカの真実の姿に一步でも近づくことができる学びの場を提供しようと考えたのである。

1. 知的好奇心を喚起する教材を求めて

私たちが、まず取り組むこととなったのは、子どもたちの知的好奇心を喚起する教材探しであった。世界を自分の目で見て、足で歩くことが好きな社会科教員といえども、そうそうアフリカを旅した者はいない。特に、私たちが授業化しようとしているサブサハラの国々（サハラ砂漠よりも南の地域）の実物資料を持っている者は少ない。そこで、どのような教材が子どもたちの心を捉えるかを考えた。

そこで提案されたのが、テレビ放映された「チョコレートも知らず一生カカオ農園で働き続けるアペティ & コフィー兄弟」¹を視聴することであった。日本で学ぶ子どもたちは、チョコレートは知っているが、その原料となるカカオ豆を知らない。反対に厳しい児童労働にあえぐガーナの子どもたちは、カカオ豆は収穫するが、それが何になるのかを知らない。この厳然と屹立する現実を踏まえることから出発することとした。

また、附属国際中等教育学校では、南アフリカ共和国のヨハネスブルグ日本人学校へ3年間勤務した経験を持つ練馬区立大泉中学校の彦坂好郎主幹教諭をゲスト・ティーチャーとして招聘し、ブズセラ²等の実物教材を持

¹ フジテレビ「世界がもし100人の村だったら ディレクターズ・エディション」DVD ポニーキャニオン 2009

² Vuvuzela 南アフリカの管楽器 1mほどの長さで「スタジアムホーン」ともよばれる。

参していただくと共に、現地写真をスライドショーとして見せていただく機会を設けた。子どもたちは思うように音が出ないブゼラに悪戦苦闘しつつも、サッカー好きの男の子は「あの南アフリカのワールドカップを思い出す」などと言って大いに盛り上がった。ソウェト³のようすやそこで暮らす子どもたちの写真に強い衝撃も受けていた。市販されているDVD資料だけではなく、現地で3年間暮らしていたゲスト・ティーチャーから直接聞く、南アフリカ現地レポートは子どもたちに大きな刺激となった。

2. テーマ「国際協力って何だろう？」―要約―

附属大泉小学校：6年

(1) 単元のねらい

- 内容知：「世界の国々の様子」の中で、アフリカの人々のくらしの様子を知るとともに、国際社会の一員として国際協力が必要であることをつかむことができる。
- 方法知：写真や統計資料、ゲスト・ティーチャーの話をもとに意欲的に調べ、調べたことを根拠にして話し合いを行い、自分の考えを深める。
- 自分知：お金や物といったものの他に、「持続可能な協力」という観点から国際協力のあり方について考えようとする。

(2) 単元について

① 教科の視点から

本単元では、アフリカを取り上げる。アフリカは児童にとってなじみの薄い場所である。しかも、どちらかという負の印象をもっているのではないかと考えられる。実際には、他の国々と同じように、優れた文化や伝統をもち、特色のあるくらしをしている。まずは、日本や他国と比較しながら、そのことに児童の目を開かせていきたいと考えている。

一方、内戦の影響や干ばつ・貧困等の諸問題が起こっており、国際社会の一員として日本が負うべき責任をとらえさせていく。その際、現在の日本が行っている様々な国際協力の様子をとらえさせることと同時に、お金や物などの協力の他に「持続可能か」という観点から国際協力の在り方を考えさせていきたいと考えている。

② 研究との関連から

一つは、「持続可能な国際協力」という観点から、世界の中で私たちが負うべき責任や態度を児童に考えさせることである。ここでは、一日本人として実際にアフリカに渡って活動に取り組んでいる人を紹介する。その人の考え方や行動力に共感することで、児童の意識や態度の変容を図っていきたいと考えている。

そして、もう一つは、話し合い活動において、自分の根拠を明確にしながら、論理的に思考を積み上げていくことである。まずは、写真・統計資料・人の話などから事実の読み取りをしっかりと行わせる。その上で、話し合いを通して各自の考えが深まっていくよう学習展開の工夫をしていきたいと考えている。

³ ヨハネスブルグの南西部に広がるアパルトヘイト時代の黒人居住区

(3) 学習の実際 <全7時間 3 / 7>

『Tさんの取り組みから国際協力のよりよい仕方を考えよう』

学習の流れと児童の主な活動	◇手立て ◆見取り
<p>○ルワンダで活動しているTさんの話を聞き、ODAの活動と似ている点や違っている点を考え、話し合った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バナナの幹や枝は実がとれたら捨てられてしまう。それを使って紙を作っているの、物を無駄にしていないし、環境にもやさしい。 ・紙が売れると、現地の人にお金が入る。 ・紙づくりがルワンダの新しい文化になるかもしれない。 ・ルワンダの紙作りが、ルワンダと似たような自然環境の他の国にも広がっていくと援助の輪が広がる。 ・現地の人に紙作りの方法を教えているので、Tさんがいなくなったとしても続けていける。 	<p>◇ルワンダで、現地の人にバナナから繊維を取り出して紙を作る方法を教えているTさんをゲスト・ティーチャーに迎えて授業をした。</p> <p>◇事前に打ち合わせをしておき、Tさんには実際の活動の様子だけを話してもらうことにした。そして、その話から活動の意味を考えるようにした。</p>
<p>○「これまでの学習を通して、「よりよい国際協力」にはどのようなことが必要かと考えたかを話し合った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お金だけでなく、技術を伝えることが大切。 ・人が行って、現地の人とコミュニケーションをとることが大切。 ・まずは現地のことをよく知ること。その上で、現地の人たちの立場になって援助の仕方を考えることが大切だ。 ・伝えるだけでなく、そこから学んで生かすことも忘れてはいけない。 	<p>◆児童は、Tさんの行動力や人柄に共感して、熱心に考えているように見取れた。</p> <p>◆児童は、よりよい国際協力のポイントとして、</p> <ol style="list-style-type: none"> ①持続可能なこと。 ②人と人とのコミュニケーションが大切なこと。 ③その現地に合った援助の仕方考えることが大切。 を上げた。 <p>*本単元の学習のねらいが概ね達成できたと見取った。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><児童が書いたTさんへの手紙></p> <p>先日は、Tさんのルワンダでの国際協力活動をくわしく学びました。ぼくたちは、アフリカの人々の生活をたくさん調べたつもりでしたが、Tさんの体験してきたことを知ると、ほとんど新しく聞いたことで、改めて本当に体験してきた方の話の重要さを感じました。(例えば、首都は近代化していても、離れた農村では貧しかったり、井戸だけでなく、バナナの繊維を使った技術で支援して、アフリカの人々を助けていることなどです。今回の授業を通して、もっとアフリカのことについて調べたくなったり、アフリカには行けないけれど募金だったら協力できると思うので、ぜひやりたいです。このような考える機会をつくってください、ありがとうございました。</p> </div>	<p>◇授業の最後にこれから国際社会で活躍していく児童に期待することを話していただいて授業を終えた。</p>

(4) 考察

①教材としてアフリカを取り上げたことについて

【成果】 大人にとってもそうかもしれないが、アフリカについては知らないことが多い。それが偏見となり、負の印象となっている感は否めない。もちろんアフリカには、貧困や飢餓など課題も多い。一方で、優れた文化や伝統があり、輸出入などをはじめ日本との関係もある。児童は、よいことも悪いことも総

合的にとらえることで、その国のことを知る。また、知ったことで根拠のない偏見や負の印象は拭える。児童の目を広く世界に広げるという観点から、アフリカを教材として取り上げることは価値があることと考える。

【課題】 一番に「資料の少なさ」があげられる。今回は、図書館の本とインターネットから調べたが、本は他の地域の国と比べて数が圧倒的に少なかった。インターネットにおいても児童向けのもは決して多くはなく、調べるサイトの選択肢が限られてしまった。また、教材研究の際、内戦や飢餓などを調べてみたが、児童には教育上見せたくない情報に当たってしまうことも少なからずあり配慮を要した。先の成果にも書いた通り、アフリカを取り上げる価値は大いにあるので、今後の課題として、児童向けの資料作りを進めていくことが求められる。

②児童に国際協力をとらえさせ、よりよい仕方を考えさせることについて

【成果】 今回は、世界の困っている状況をとらえさせる時には、「世界の飢餓の状況」を示す地図とDVDを活用した。また、ODAをとらえさせる時にもビデオを活用した。児童に国際協力というものをとらえさせることは難しいように感じる。従って、その際には今回のように視聴覚教材を有効に使うことが望ましいと感じた。そして今回は、実際にアフリカのルワンダでNGO活動をしているTさんをゲスト・ティーチャーとして迎えた。実際に活動に取り組んでいる人との交流は、児童にとって大変有意義なものであった。Tさんの活動に触れたことで、児童は国際協力をより身近に感じ、Tさんの工夫から様々な発見をすることができた。さらに今回のように、よりよい国際協力の在り方を考える学習をすることは、社会科としての目標を達成するだけでなく、グローバル社会で活躍しようとする児童を育てるという観点からも意義深い学習になる。

【課題】 国際協力をとらえさせる時、児童にどれくらいの事例に触れさせることが、児童の確かな社会認識を深める上で必要なか検討を要する。取り上げる事例を多くすると、授業時数の面、学習内容の理解の面で課題が出てくる。今回は、ODAとTさんの活動からとらえさせようとし、成果があがったと評価しているが、教材をさらに開発して学習の改善を図っていかねばと考える。

③筋道立った話し合い、根拠のなる話し合いについて

【成果】 これまでの学習で積み上がっている部分があり、大きな手立てを打たなくても済んだ。児童が筋道立った話し合い、根拠を明確にした話し合いの良さを実感し、習慣化していけること今後も地道に続けていきたい。

【課題】 先にも書いたが、児童がどれだけ資料を集められるか、読み取れるかということを教師が事前につかみ、必要な準備をしておくことは欠かせない。また、日頃の地道な積み上げがとても重要である。どの単元の学習で、それを重点的に行っていくか、カリキュラム全体からよく考え実践していくことが求められる。

3. テーマ「さまざまな資料から読み解くアフリカ」—要約—

附属国際中等教育学校：1年

(1) 本単元のねらい

今回の改訂において、学習指導要領は「世界に関する地理的認識の育成を重視」する方向へと舵を切った。そして「地図の読図や作図は、地理的事象の理解だけでなく、地理的な見方や考え方をはぐくむ上で必要不可欠な能力」と謳う。そこで、本単元においては『アフリカ』を取り上げ、さまざまな資料（地図・景観写真・カルトグラム（変形地図）・新聞記事・映像・書籍・音楽・民族衣装等）から読み解いていくこととした。折しも10月は、「STAND UP」の世界同時イベントが行われることから、世界から貧困をなくすために私たち一人一人が立ち上がろうと考えた。

全4時間構成の1時間目にあたる本授業では、以下の3点を目標においた。

- アフリカの広大さ・多様性を、さまざまな資料をもとに確認する。
- これまでの既得知識を駆使して、イメージ化された世界地図（カルトグラム）を読み解く力をつける。
- 世界から…アフリカから…貧困をなくすための方策を考える。

(2) 学習の実際 <全4時間 1 / 4>

『アフリカの貧困を終わらせるために、わたしたちにできること』

	学習活動	教師の発問Qと説明●と予想される生徒の反応△	留意点
導入 10	☆アフリカのイメージを共有する。	Q.「アフリカ」というコトバからイメージすることをイメージマップにまとめてみよう。 △ライオン・キリン・砂漠・ジャングル・黒人… ●スライドでアフリカのイメージを確認しましょう。	◇心身をほぐすために実施する。
展開 I 15	☆アフリカの広大さを確認する。 ☆アフリカの多様性を確認する。 ☆アフリカをカルトグラムで見よう。	●アフリカ大陸の広大さを確認しよう。 Q.日本とほぼ同じくらいの面積の国は… Q.日本の何倍くらいあるのだろう… △ 50倍 100倍 … ●アフリカの多様性を確認しよう。 Q.アフリカの国の数は… いくつくらいあるだろう… △ 10 30 50 70 … ●スライドを見ながら、アフリカを気候区分に従って縦断してみよう Q.アフリカの多様性を感じとることができましたか… どのような点に最も多様性を感じましたか… △大きい さまざまな気候 黒人ばかりではない… Q.アフリカをカルトグラム（変形地図）で見ると、どのようなことに気づきましたか…。 △ 穀物の生産量が少ない…。農産物の輸出がない…。	◇地図帳で、しっかりと確認作業をさせる。
展開 II 15	☆MDGs（ミレニアム開発目標）を知る。	Q. MDGs（ミレニアム開発目標）というコトバを聞いたことがありますか… ・貧困や飢餓をなくそう ・小学校に通えるようにしよう ・性による差別をなくそう ・赤ちゃんを守ろう ・お母さんを守ろう ・病気を防ごう ・環境をよくしよう ・世界の人みんなで助け合おう	◇MDGsをわかりやすく解説する。 *適宜、写真・DVD等、視覚に訴える資料を扱う。
終結 8	☆本授業のEssential Questionの提示	<本授業の Essential Question > ●世界から貧困をなくすために STAND UP TAKE ACTION に参加したいと考えます。 Q. アフリカの貧困を終わらせるために、あなたならではのアクションを考えてください。 ★最後に、一人一人が STAND UP のプラカードに思い思いのコトバを書きつけて立ち上がろう。	◇貧困をなくすための方法を当事者意識をもって考える。 ◇記念写真を撮影する。

(3) 研究協議会での参観者の声

- ・非常に活発に発言する明朗な生徒が多い。教員が脱線させずに、いなしながら授業を進めていくさまは、日常から生徒との関係が構築されていると感じた。
- ・資料が非常に多いが、生徒はずっと注目して授業に参加していた。ちょっと知っていることを使うと理解できるような内容で、意欲的な活動につながっていた。
- ・中等教育学校において、前期課程（中学段階）でどこまでのことを身につけさせるか、どのように高校段階へと連携させるかを考えている。必要に応じて高校内容を前倒しして踏まえさせるところはあるが、重点的に厚く取り扱うようにはされていない。今回の授業は提示資料に生徒の興味を引き出すようなしかけが多く、生徒の反応もよかった。
- ・多くのコンテンツを保有されていることは強みである。インターネットも有効に活用されているが、信憑性や著作権などの問題も考えなくてはならない。また良い映像だとしても内戦の写真などであまり衝撃的なものでは生徒が嫌悪感を持つこともある。適切な資料とは何かを考えていかななくてはならない。
- ・情報がたくさんあると、削らずに全部を押し込もうとする傾向がみられるが、この授業ではテーマがはっきりしており、取捨が適切になされていた。全体としては削る作業よりも、「これだけは入れたい」という資料から足すように設計していくと削れるものもわかり、こだわりも入れられるように感じた。
- ・考查問題では、おさえておきたい知識は短答式で…、スキルが必要な図表の読み取りで、授業において練習させて提示する。資料から自分の立場を決めて考えを述べさせるなどの工夫がなされている。（*ワークシートの活用は、登校しぶりの生徒の学習課題として有効であると感じた。）
- ・リーダーの育成という観点では、自分の体を使う機会への参加・経験を重視している。さまざまなボランティア活動などを通して、見守られて育てていることの自覚や自分ができることをやること、社会コミュニティーの一員となれる生徒の育成が目指されている。

(4) 授業を終えての考察

本授業は、アフリカをさまざまな資料<地図・景観写真・カルトグラム（統計的事実を地図上に表現した各種の図形）・新聞記事・映像・書籍・音楽・民族衣装等>から読み解いていくこととしたものである。授業実施を10月とし、世界から貧困をなくすために、私たち一人一人が立ち上がろうと考える世界同時イベント「STAND UP TAKE ACTION」に合わせることにした。

これは、10月6日が「国際協力の日」であり、10月17日が「貧困撲滅のための国際デー」であること。また、例年10月第1週の週末に日比谷公園で「グローバルフェスタ」が開催されるので、この時期に合わせて、アフリカ学習を実施することが最適であると考えた。時宜を得たというコトバがあるが、教室でのグローバルな視点を身につける学びの後、時間のズレなく学校外の活動へと広げることができることが大切である。

また、グローバルな能力を培うためには、頭の中だけで知識や情報を操作するだけではなく、ボランティア活動等の体験を通して身につけていくことが肝要である。研究協議会の際、本校が力を入れている MYP⁴ 5 領域の一つである Community & Service と社会科との連携をさして、自分の体を使う機会（さまざまなボランティア活動）への参加・経験を重視していることを高く評価する意見をいただき。這いまわる必要はないが、それ相応の経験なくして知識は確実なものとはならない。他の地域の学習にあっても、さまざまなイベントとの関連を意識して学びを確実なものとしていきたい。

⁴ Middle Years Programme

4. アフリカ理解を進めるために

「国際ユース作文コンテスト」（五井平和財団・ユネスコ主催）において、「学校奨励賞」をいただいたことを縁に、2013年2月、「外交官プロジェクト」の一環として本校にアフリカ：ルワンダ大使をお迎えすることとなった。アフリカ55カ国（西サハラを含む）の中でも、ルワンダを選定した理由は、NPO 法人ハーベストタイム代表：津田久美子氏が主宰する「バナナペーパー（BP）」⁵活動に対して深い関心を抱いていることはもちろんであるが、あの1994年のルワンダ虐殺（ジェノサイド）から約20年、「アフリカの奇跡」とまで称されるほどに急成長を遂げているルワンダの現状を駐日大使直々に報告いただきたいと考えたのである。

ルワンダの首都キガリの近代的な都市景観を見聞して、子どもたちは驚嘆の声をあげた。まさかこの町で約20年前、ジェノサイドがあったのだということは全く信じられない。それでは、なぜ、この町でジェノサイドが起こったのか、何が人間を狂気へと駆り立てたのか、そして、何がこのような奇跡の復興を遂げる原動力となったのかを共に考えたいと思った。このルワンダの復興を学ぶことは、3.11で深く傷ついた東北地方の復興に必ずやつながるものと確信している。

『ルワンダから学びたいこと』

神尾恵美（15）

先日、学校行事で駐日ルワンダ大使のお話を聞く機会があった。大使は「ルワンダが日本から学ぶことも多いが、日本がルワンダから学べることもたくさんある」と遠慮がちに言った。その一つが「女性の力を活用する」ことだった。

ルワンダ憲法は「あらゆるレベルの意思決定機関において、従事者全体の最低でも30%が女性代表となることを確保する」となっていて、現在の議会（下院）で56%、内閣は34%、最高裁判所では50%を女性が占めているようだ。「男性しか使わないのは人口の半分しか使っていないことになるからもったいない」と大使。これは今の日本が一番見習うべきことだと思う。

日本では育児で離職せざるを得なかったり、給料が男性の7割にしか満たなかったりと問題が多くある。もし女性閣僚が増えたら、女性の雇用環境や生活もよくなるのではないか。「女のくせに」という言葉があるが、女性が活躍できる場と雰囲気をつくるのが大切だと思う。 2013年3月9日 朝日新聞 声

『奇跡呼んだ女性の活力』

スコット・アトム（15）

学校でルワンダの大使の講演を聞くことができた。ルワンダでは約20年前、フツ族が約100万のツチ族などを殺すという民族大量虐殺があった。そのときは、ルワンダが元通りになることはないだろうと思われていたが、今では「アフリカの奇跡」といわれるまでに国が復興した。

約20年でここまで経済力のある国に成長できた理由について、大使は「女性へのエンパワー（力をつけさせること）」が一つの大きな要因だと言っていた。女性は人口の5割を占めているのに彼女たちを使わないのはもったいない、せっかくある労働力を無駄にしているのと一緒だと言う。実は、ルワンダの国会議員の約半分は女性なのだ。それに比べると日本の国会は男性ばかりだ。日本はまだまだ発展途上国から学ぶことがたくさんあると感じた。 2013年3月27日 東京新聞 発言

⁵ ルワンダでは、主食の一つである「バナナ」の幹や枝が大量に廃棄されています。これらの幹や枝から繊維を取り出して、パルプに加工・紙漉きの技術を使って、環境にやさしいエコ・バナナペーパー（BP）の生産をめざしています。BP またはBP クラフト製品で、ルワンダ国内での販売・土産物による収入の確保により、雇用の創出・拡大が見込まれます。

以上、NPO 法人ハーベストタイムのパンフレットより

*なお、附属大泉小学校の指導案にあるゲスト・ティーチャーを務められた T さんとは、この津田久美子さんである。

高校入学を控えたこの春、駐日ルワンダ大使の講演を聴いた。ルワンダは約20年前、ジェノサイド（虐殺）で数十万人の国民が犠牲となったが、今は経済発展が進んでいるという。

日本がルワンダに学ぶべき点は、女性の地位向上だ。ルワンダでは女性議員の割合が多く、会社や団体の代表を務める女性も珍しくないという。大使は「男性だけでは、国全体の半数からしか良い人材が集められない」と言っていた。日本も、女性がもっと自由に羽ばたいて活躍できる社会になってほしいと願う。

2013年4月30日 読売新聞 U-25

5. 今後の課題

今年、2013年には TICAD V（Tokyo International Conference on African Development）が開催される。

1月のアルジェリアの人質事件が、TICAD Vにどのような影響を与えるのか。安倍政権は「人質事件を踏まえた紛争予防への取り組み」を主な支援策とするという。インフラ整備中心の途上国援助（ODA）を国境警備のための車両やフェンスの設置などに充てることを検討しているという。また、海外で紛争などが起きた場合に自衛隊を派遣して日本人の救出や輸送をできるよう自衛隊法を改正する必要があるという認識を示している。

今、アフリカに本当に必要なことは、国境警備のための車両やフェンスの設置等の治安維持や自衛隊法改正なのであろうか。アフリカ諸国の多くは、政治や社会の脆弱さが軍の存在感を大きなものにしてている。内戦終結も武装解除も当然必要だが、アフリカには、そのような事態にならないための努力や支援が不足していると強く感じる。私たちは、一部の人や一部の企業のためだけではなく、アフリカの多くの人々が、少しずつあたりまえの暮らしができるようにするために、今、何を為すべきかを考えることが大切である。

かりそめの絆や高尚なコトバではなく、アフリカのために「自分に何ができるか…」と絶えず問い続け、小さなことからでも一つずつ子どもたちに負けないよう行動に移していくことが、私たち教師に望まれていることと確信する。

